

生まれつき重度の脳障害に冒された娘を持つ一人の母親がいる。そこには精神的にも肉体的にも、極限を超えてしまった日常がある。余人には窺い知れないが、それに耐えることも、わが子なら当たり前といえるかもしれない。しかし塩沢さんの場合は、わが子に対する個の愛情にはとどまらなかった。娘との交流を通じて宇宙の根源を知り、他者の幸せも願うようになっていくのである。

ホリスティック・アウェアネス・スペース

「水輪」オーナー

塩沢みどり

しおざわ・みどり 前頭葉脳損傷という重い障害を持つ娘・早穂理さんとの生活の中で、自分の心を深く見詰め、さまざまな気づきを得る。坐禅・瞑想・言霊修行などを経て臨死を体験、個を超えた広大な世界を知る。平成5年、夫君・研一氏と長野県・飯綱高原に、生活のすべてを瞑想するための「スペース・水輪」を開設。新時代の哲学、医学、衣食住、芸術などの中枢たらしめと目指す。



●純度100%の愛と祈り、そして誠

命を慈しむ

最重度障害の娘の誕生

長野県・飯綱高原の山懐にホリスティック・アウェアネス・スペース「水

輪」を開設してから四回目の夏を迎えました。

ホリスティック・アウェアネスとは全包括的な気づきの意。ここは三十人が宿泊でき、瞑想や坐禅をしたり、小

さなイベントを開いたりできる会員制の施設ですが、ごく普通のサラリーマン家庭だった私たち夫婦が瞑想スペースなどを開こうと考えた遠因をたどっていくと、今年二十二歳になった娘の

早穂理^{さおり}を措^おいてありません。

二十二年前の昭和五十年四月三日、娘は前頭葉脳損傷、最重度の障害者という宿命を背負って生まれてきました。多分それは難産であつたうえに、運悪

くお医者さんが不在だったことが重な
ったからだと思います。

出産の日は医師会の選挙があるとか
で、お医者さんが出かけていました。
難産になるだろうとは予測もしなかつ
たからでしょう。帝王切開ができれば
なんということもなく済んだのかもしれ
ませんが、帝王切開は医療行為です
から、看護婦さんでは手術もできず、
お医者さんが戻ってきてくださったと
きは、私はすでに青息吐息で、産む力
を使い果たしていました。子供も自分
で出る力がなく、産道の中で窒息寸前
の状態でした。

産まれたとき、娘は泣き声一つ立て
ませんでした。初めての出産でしたか
ら、どういう兆候が安心なのか心配な
のか、私には何もわかりませんでした
が、看護婦さんは私を安心させようと
して、盛んに「大丈夫ですよ」と言っ
てくれました。しかしお乳の吸いつき
も悪く、それも私にはいいことなのか
どうかわかりませんでした。私なりに
覚悟のようなものが備わっていたの
かもしれません。

いながらCTスキャンですぐにわか
りますが、二十二年前は検査に時間が
かかりました。当時の日本ではまだ十
分な検査ができませんでしたので、ア

メリカまで血液を送って調べてもらい
ました。検査の結果は、分娩時の酸素
欠乏による頭蓋内出血。「お嬢さんは最
重度の障害で、辛うじてハイハイがで
きる程度でしょう。歩くことも、自分
で食べることも、話すこともできない
でしょう」ということでした。

親にとっては絶望的な宣告であるは
ずでした。しかし検査の結果を聞かさ
れたとき、私は取り乱しもしなかった
し、泣き叫びたいというような激しい
衝動も感じませんでした。自分でも不
思議なほど冷静で、「来るべきものが来
たな」という気持ちでその宣告を受け
止めていました。

ただしこのときを境に、すべてが変
わってしまったことは確かです。それ
も一気になりました。いくつになっ
ても話すこと、歩くことはおろか、白
力で食事もできず、排泄もできません。
体力的にも精神的にも限界を感じ、
施設に預けることも考えないではあり
ませんでした。結局は右往左往しな
がらも、夫婦二人の手元で育てること
を選びました。そんな子供を抱えた毎
日は、悲しんだり、泣いたりという次
元を突き抜けてしまったものでした。

自ら選んだ道とはいえ、そのための代
償は数限りなく払い続けなければなり
ませんでした。

ませんでした。

ものすごく貴重な プレゼント

しかし一つずつ乗り越えていくうち
に、最重度障害という娘を産んだこと
が、私たち夫婦にとっては、ものすご
く貴重なプレゼントだったということ
に気がつくのです。

そういう娘がいたお陰で、私の周り
ではいろんなことが起こり、私は実
にさまざまなことを学びました。

もちろん「貴重なプレゼントをいた
だいた」と思えるようになるのは、ず
っと時がたつてからのことです。それ
までは娘の世話に疲れ、周囲の雑音に
脅かされ、将来のことを思えば、不安
に心を責め苛まれる日々を送るばかり
でした。

普通は子供が成長すればするほど、
親の負担は軽くなっていくはずで
す。ところがわが家では、娘が成長して身
体が大きく、重くなっていくにつれ
て、私たちの負担は重くなっていくの
です。

娘が生まれて一年後に、私たちは東
京から主人の実家のある長野に戻りま
したが、そのころはまだ障害者に対す
る根強い差別が残っていた時代です。
「塩沢さんの家は……、ああいう娘の

いる家は……」と、至るところで陰口
を聞かされ、ノイローゼになる寸前ま
で疲れてしまいました。

このまま娘が大きくなっても、学校
にも行かせられない。お嫁にやること
もできない。いや、それよりも私たち
が死んでしまったあととは一体どうなる
のか、と考えると、永久に出口の見つ
けられない迷路に迷い込んだような気
持ちになってしまいます。いつそ娘の
首を絞めようかとまで考えたこともあ
りました。

そんなときに、
「在るがまま為すがままに生きよ」
という禅の本の広告が新聞に出てい
るのを目にしました。苦しくて苦しく
てたまらないときでしたから、「こうい
うふうに生きられたらどんなにいいだ
ろうか」と私は吸い寄せられるように
見入っていました。

それまでは坐禅のことなど考えたこ
ともありませんでしたが、これが禅の
言葉だと知って、坐禅をさせてくれる
お寺を探しました。そして一度座らせ
ていただいただけで、取りつかれたよ
うになってしまいました。坐禅をして
いると、まだ来ない未来を勝手に悲観
的に捕らえて悩んでばかりいる日常が
まるで嘘のように心が安定するのです。

われてしまひます。たとえば、娘をバギーカーに乗せてスーパーマーケットへ買物に行かなければなりません。目の焦点がずれてしまひ、目も締めることができないので、半ば舌を出して、よだれを垂らしたままの娘を見ると、通りすがりの人は一斉に好奇の目を向けます。

最初のうちは家に戻れば、坐禪をし
てたどり着いた気持ちなど忘れてしま

坐禅で心の
苦しさを克服

娘の世話に忙殺されているときでもふと坐禅をしているときの自分を心に浮かべてみる。それを繰り返すうちにいつしか「見られている」と思っても心が乱れなくなりました。無遠慮な視線を向ける人に出会っても、たんだんとした心の状態を保てるようになったのです。

氣持ちの問題だけではなく、坐禪を
 続けて呼吸法を覚え、身体がそのよう
 にできてきたということもあつたかも
 しません。当時はまだ言葉にして表
 現できませんでしたが、何か自分が違
 ってきている、ということとはよくわか
 りました。

すると、前はどうなるかわからない
将来のことを勝手に思ひ煩って悲し
んでいたものでも、いたずらに悲しま
ないようにしてきました。感情の揺れ
も、それほど激しくなくなってきました。

ところが自分が一つの目標としていたところにたどり着いたように思うとその喜びを根底から覆すようなことが待ち構えているのです。

どんな視線を向けられても平然としていることができるようになったといっても、それはいつも行くスーパーという特定の場所で、それなりのトレーニングができたから、ということにすぎませんでした。たまにしか行かないようなところに行つて、違う状況にさらされると、一遍に感情は乱れ、人の目が気になってしまふのです。

あるとき、娘を抱いて電車に乗りました。トレーニングのできていない状況ですから、大勢の視線にさらされると、私の感情はまた乱れ始めます。しかしそのとき、私はふと坐禅をしているときの自分を思い起こしてみたのです。

坐禪をするときは、半眼の状態で呼吸を整えていきます。電車の座席に座って子供を膝の上に抱きながら、私は坐禪をしているつもりで、ゆっくりと呼吸を整えていきました。すると初めての状況だったのにもかかわらず、す

よだれを垂らしたままの娘は、人には汚いと思えるかもしれませんが。それよりも何よりも、私自身の心の中にも、そんな子供を抱えている自分が恥ずかしいという気持ち^{ちがひ}が巣くつている。だから人に見られるのが恥ずかしいと思う。

原因は人ではなく、すべて自分にあるのではないか。すべては自分の問題なのではないか。他人の視線も、自分の心の苦しきも、結局自分自身がつくりあげたものなのだ。

そういうことに気づかされてからは場所かどこであらうと、半眼になり、坐禅をしているつもりになれば、私は微笑みすら浮かべることができるようになりました。

そして、それから、早穂理は私の師、私は早穂理の弟子となり、この師から生き方、心のあり方を教えてもらう生活が始まりました。

まるで

観音さまのよう

そしてこんな表現をするのはとても不遜なことだと思いますが、私かもっともうれしく、自分でも気に入ったこ

とは、ある人から「早穂理ちゃんを抱いているみどりさんは、まるで観音さまのようだ」と言われたことでした。

そのころの私が感じた他人の視線といえは、気の毒そうに見てくださるのはいよいよ、大概は何か不潔なものを見るような目で私と娘を見るものばかりでしたから、「観音さまのようだ」と言っただけでくださる人もいたのだという思いは、私を大変に勇気づけてくれました。

ところが乗り越えたと思った矢先に再び新たな壁を見出して、打ちひしがれてしまうようなことはいつまでたってもなくなりません。

三歳ごろの娘は夜になってもなかなか寝てくれませんでした。睡眠薬をもたせて与えたのですが、まったく効きません。睡眠不足が続いて、私は自律神経失調症にもなりかけましたが、あるとき、娘の生活のリズムが毎日正確に一時間ずらずれていくことに気がついたのです。それがお月さまのリズムと一緒だということはすぐにわかりました。

睡眠薬を与えて無理矢理眠らせようとするのは、娘を私たちに合わせることでした。これからは娘を私たちに合わせようとせず、私たちが娘に合



塩沢みどりさんと娘の早穂理さん

せるようにして、親子三人だけで生きていこう。そう決心して、十八年前、長野の町中の家を捨て、飯綱高原に早穂理庵という小さな住み家をつくって、引っ越してきたのです。

しかし娘に合わせよう、と思うことは簡単でも、実行に移すのは容易なことではありませんでした。一日に一時間ずらずれるということは、約二週間後には昼夜がまるつきり逆転してしまふということでした。一か月後には再び元に戻るのですが、とりわけ辛いのは夜中ずつと起きていて、食事を与えなければならぬことでした。

娘はお月さまのリズムで生きていま

すから、私たちの世界の昼夜は関係がありません。けれどもこちらは何年も染みついた習性で、夜になれば眠くなってしまうのです。

娘は自分で物を噛むことができません。普通はミキサーで食べ物をすり潰し、チューブで食べさせますが、私は娘に残されている味覚だけは満足させてやりたいと思っ、自分の口の中で細かく噛んでから与えるようにしていました。しかし毎日三度三度のことが私をだんだん苛立たせるようになってきました。

自分が食べるわけではないといっても、食べたくなるときに口に物を入れ

るのは大変な苦痛です。しかもこちらは眠くてたまらないような夜中であればなおさらです。思わず「早く食べなさいッ!」と、娘の口に邪険にスプーンをねじ込んでしまったこともありました。

一つの甘えも ミスも許されない

やってしまってから、私はものすごく後悔の念に襲われました。手足が不自由でも口の利ける子供なら、何か言い返すかもしれません。言い返してくれば、それだけでも救われた気持ちになります。しかし娘には言い返すこともできませんし、怒って私を叩くこともできないのです。まったく抵抗もできない子供に、なんとという鬼のようなことをしたのだらうと、私は自分自身にぞっとする思いでした。

坐禅のお陰で成長させていたのだと安心し、自惚れていた私でしたが、それはあくまでも理性でコントロールできる範囲のことにすぎなかったのです。眠くて意識が朦朧としていたようなときには、理性では抑え切れない、どうしようもないものが、身体の奥深いところにあるのだと気づかされました。

しかし「人間なのだから仕方がない

さ」とは言っていられませんか。一つの甘えもミスも許されぬ。娘に限る限り、私が百發百中完璧でなければ、娘の生を絶ってしまうことになるのです。脳の損傷からくるけいれん発作や呼吸困難などがいつ起こるかわかりませんが、少しの油断も許されません。

娘には「お腹が空いた」とか「水がほしい」と言うことはできませんし、身体のだこがおかしくても、それがお腹なのか足なのか、訴えることができません。

いまでは「水をほしがっているな」と思ったときには、すでに蛇口をひねっている、というところまで娘の気持ちが読めるようになりましたが、私がぼんやりしていたのでは、何一つ気づいてやることができません。

娘が発信していることはすべてキャッチしてやらなくてはいけない。それには夜中、娘に付き合っていることが辛いとか、人の目が気になるというような心の塵を払って、いつも私のアンテナが研ぎ澄まされた状態でいなければならない。

そう思っただけで始めたのが坐禅、瞑想でした。それがやがて私に東洋医学への興味も抱かせるようになりました。

月に一度、東京から東洋医学の先生

に来ていただき、娘に鍼の施術をしてもらっていました。私の友人には難病といわれる子供を抱えている人もおりましたから、そのうちに自宅が施療院みたいになっていきました。友人の友人、あるいはそのまた友人というように、私とは初対面という人もやってくるようになりました。

こうして娘だけではなく、わが家を訪ねてこられるさまざまな方にも等しくよくなっていた方がいいという思いが高じて、四年前の「水輪」の開設となるのですが、考えてみると、それまでの十八年間は、私たち夫婦がこのスペースを開くために、娘が準備をさせてくれた期間だったのです。

純粹な気持ちで通じた

坐禅、瞑想、東洋医学と、私の関心が次々と広がっていくということは、私自身のエゴを、いかにそぎ落としていけるか。娘と一緒に生きようという心構えが、口先だけでなく、どこまで本物か。それを娘から試され、それに私が応えようと努力することでもありました。

心では「どんなことがあっても娘と生き抜くぞ」と決心していても、私は難病の子供を抱えた母親であると同時に

に、人間であり、女です。たまにはゆつくりと眠りたいし、温泉にもつかってみたい。きれいな洋服だって買に行きたいよ。

悲しいかな、ふと、そう思ってしまうことがあります。思ってしまったから、あわてて打ち消すのですが、ほんの一瞬といえども、娘に対して張り巡らしているアンテナを曇らせる瞬間です。すると不思議なことに、娘の容態が悪くなるのです。

昨年の八月末もそうでした。少し体調を崩し、風邪だろうと思っていましたが、日がたつにつれて呼吸がゼーゼーいうようになり、「何か変だ」と思ったときには呼吸困難に陥っていました。救急車で長野の日赤病院に入院させましたが、肺炎を起こしており、すでに左の肺が真っ白になっていました。私たちのどの奥には空気と食べ物を感じ取るセンサーがあるのですが、それがうまく機能せずに、食べ物か肺に入ってしまったのです。

入院後しばらくすると、熱が四十一度近くまで上がり、脈拍も二百二十五という、とても考えられない状態になりました。私はほとんど不眠不休で、「頑張れ、頑張れ」と祈りながら娘の手を握り続けていました。

このときの頑張っただけという気持ちには、掛け値なしに純粹な気持ちだったと思います。ふだんの娘なら手を握られるのを嫌がって振り切ろうとするのですが、このときはしっかりと握り返していました。私の純粹な気持ちが通じたのだと思いました。

もう一方では、そろそろ楽にさせてやりたいと思う親がいても、それも親としての純粹な気持ちではないか、と言われる方もあるでしょう。もちろん親の気持ちとしてわからないわけではありません。私も、身体中にチューブを刺され、暴れてそれを外してしまわないように両手両足を縛られた娘を見たときは、二十一年間も苦しんできたおそのうえにと、なんととも言えない気持ちになって、

「早穂理、いまでもよく頑張ったね。もう楽になってもいいよ」

と、思わず声をかけそうになりました。

どこまで誠を尽くせるか

しかし娘の身体を見ると、彼女が生きよう、生きよう、としていることがわかったのです。まだ二十一歳という若い身体は、昨日吹き出た膿があつても、今日はそれを癒そうとしているで

はありませんか。

それを見て、私はきっぱりと心を決めました。

「早穂理、たとえあなたの肺が片方しなくなろうとも、ハイハイができなくなつて、一生寝たきりになろうとも、絶対に生き抜こうね。お母さんもあなたが生きていてよかった、と思えるような生き方を必ずするからね」と誓いを新たにしたのです。

もし「あの世に帰ってもいいよ」と私が思ったとしたら、娘は帰ってしまったでしょう。私だって一瞬はそう思ったのですから、苦しむ子供を見た親がそう思ったとしても、その心情はよくわかります。

しかし「帰ってもいいよ」という思いからは、この世に生を受けた者の命から湧き上がってくる、愛というエネルギーのかけらが感じられないのではないのでしょうか。親と子は肉体をもつてこの世で出会ったのです。その意味を自らなくしてしまおうとしていることになるのではないのでしょうか。子供には、生きてこの世で愛し合えなかったという空しさだけが残るのではないのでしょうか。

愛、あるいは誠がないことは空しいことはありません。二か月半も入院

生活を送りましたが、元気になった娘を見て、私はつくづくそのように感じました。

娘には表面上の美辞麗句は通用しません。私や主人が彼女への誠を百賀、突き詰め突き詰めたところで願ったり言ったりした言葉でなければ通じないのです。

これは私たち親子に限ったことではありません。「水輪」ではコンサートを開くことがあります、見てみると、娘は熱心に聴いていることもあり、演奏が始まった途端に這って部屋を出て行ってしまうこともあります。何度も観察しているうちに、それは演奏される音楽が本物でなかったり、演奏者に真心がこもっていないと出て行ってしまうということがわかってきました。

また、家の中で彼女が一番気に入っている場所は仏壇の前です。ここにいると、まるでお経を上げているかのようになり「アーアー」と声を上げ、両手を合わせるように手を叩いたりします。主人の実家へ連れて行くと、必ず仏壇の前へ這って行き、そこにいるときが一番機嫌がいいようです。

そういう所作を見ていくと、わが子がでありながらわが子にとどまらない。娘が宇宙の深いところつながっている

という思いは、日増しに強くなっていきます。その娘がいたお陰で出会わせていただいた多くの方々もおられます。

そういう娘や多くの方々の中で、私がどこまで自分のエゴをそぎ落とせるか、どこまで誠を尽くせるか。私自身が成長しながら、同時に試され続けるのだらうと思います。

いま、長野県の飯綱高原にはさわやかな風が吹いています。「水輪」を訪れる人々に、命の響きが、二十二年間のさまざまな体験や思いを超えて確実に伝わっています。何度も死のうと思いい子供の首を絞めようとしたときもありました。それらの体験が、いま生きています。

最近、地元の新聞やテレビが、癒しを中心とするヒーリングコンサートや「水輪カウンセリングルーム」などを取り上げ、私たちの営みが少しずつ知られるようになってきました。医師、僧侶、経営者、主婦、会社員など、さまざまな人々が「水輪」を訪ねて来られます。早穂理とともに生きてきた二十二年間が、たくさんの人々とのつながりを生み出しています。

それはまるで水の輪が広がるように、人の心に響きを呼び起こしています。

革新・創造・共生をめざし感動の生き方・働き方の実践方法を修得する

感性教育と職場生活訓練

研修ポイント 職場を人格創造のための感性を鍛える道場と考え、理性と感性能力の正しい活かし方を体得。理性から感性への価値転換を自覚し、感性人間への全く新しい自己創造と性格改善が可能となる。

●指導講師紹介 福岡県出身・工場企業の電機設計技師として10年間活躍。20代より人間開発の探求と実践に取り組み、社団法人・倫理研究所の主任研究員を経て独立。平成元年・芳村忠風先生との合意で「感性人間塾」を創設。革新的な企業研修を実施

日本感性教育研究所

感性人間塾

〒414 静岡県伊東市宇佐美3012-3
TEL0557-48-8833 FAX0557-48-8873

＜鬼木豊所長の著書＞

- 感動なき企業は減る ¥1200
- 感動の実学と実践 ¥800
- 感性人間学 ¥1500
- 感性を鍛える ¥1300
- 感性が回復する ¥1000
- 親子のための感動教育 ¥1000
- 母娘で開く「感動の扉」 ¥1200